

会議議事録(抄)

会議名	2025年度専門学校東京テクニカルカレッジ 第一回データサイエンス系教育課程編成委員会
開催日時	2025年7月18日(金)15時00分～17時00分
会場	専門学校東京テクニカルカレッジ 地下1階テラホール、11階1103教室
参加者	<外部委員:4名> (順不同・敬称略、役職は委員名簿参照) 北川 淳一郎(LINE ヤフー株式会社/データサイエンティスト協会スキル定義委員) 坂本 一憲(WillBooster 株式会社/早稲田大学研究員客員准教授) ポール・リー(Terakoya.AI) (欠席)佐藤 周平(株式会社セラク) <内部委員:1名> 金井 伸也(専門学校東京テクニカルカレッジ データサイエンス+AI 科科长) <オブザーバー:1名> 鈴木 健太(専門学校東京テクニカルカレッジ データサイエンス+AI 科)
	<系別分科会>(第二部) 1.議長挨拶 金井より挨拶 2.前回(系別分科会)議事録の確認 3.意見交換
討議内容	■2025 年度学期以降の近況報告 + 在籍状況と今後の募集 金井：今年度も留学生が多く入学。これまで男子学生が多かったが、今年度は女子学生の入学が多いのが特徴。 オープンキャンパスの見学者内訳も留学生が大半を占める。日本人の見学者はぼつぼつと入るような状況。 + 在学生の学習状況 金井：1年生は学生間の交流があり活気がある。2年生について授業中は大人しく、授業が終わればすぐに帰るような状況。2年生は留学生中心に単位習得率が低い。進級要件を満たさず、2年に進級できなかったものも4名いる。日本人学生は精神的な不調を理由に長欠する者が多い。1年生は留学生の履修状況は二極化しており、特にミャンマー、ネパール、モンゴルなどの留学生の成績は悪い。日本語能力が不十分な学生に対して、学校全体で JLPT N2 相当の対策講座を実施している。 今年度の RJP 活動はデータ分析コンペティションへの参加。1チーム3～4人で1、2年混成のチームでコンペに参加させている。 + コメント：Kaggle の実績なら多くの DS 系企業で興味を持ってもらえる ポール：学生に直接聞いてみても、データサイエンスを学びたいと思って入学している留学生は少ない。授業態度を見て続かないと思うところはあった。 北川：企業では Kaggle の知名度は高く、社内に Kaggle の称号持ちがいればそれをアピールする会社も増えた。ブロンズでもメダルが取れば学生としてはアピールになるし、挑戦経験だけでも面接等で話すネタにはなる。 学生のスキルの定量化素材として、現場では重視されないが就活なら検定等の資格も使えないことはない。 ポール：海外を見ても、分析コンペは Kaggle に一本化されている。Kaggle の成果は強みになる。

+ 就活状況

金井：2年生の就職状況について、決まっていない学生が大半で厳しい状況。30歳前後の学生は中途扱いになるので、これから始動していく段階。

日本人でも苦戦している中で、留学生はさらに厳しい。1年生はさらに早期の対策の必要性を感じている。留学生も日本での就職を希望している。

就活方法は、民間の就活サイトへの登録、専門学校向けの求人サイトへの登録、学校に来た求人の紹介など。

+ コメント：データサイエンティストにこだわるとニーズとミスマッチする

北川：エントリーの絶対数が足りない。ドメインの軸が無いのにデータサイエンスを活用できるような仕事は難しいので、まず自分が軸としたい企業に就職することを優先して、データサイエンスが仕事に役立てられるかどうかはその後自分で考えればいい。中小企業はデータサイエンティストを採らないし、大企業は大学院卒が前提。最初から希望の会社を狙うのではなく、長期的なキャリア形成を見越して、まずどんなかたちでも1社目に滑り込むことが大事。

北川：外国人だから働きにくいということはないし、現に外国籍の同僚も多い。ただし、日本で働く以上、日本語でコミュニケーションをしっかりとれることは前提。

ポール：データサイエンス系の学部・学科に通う日本人大学生でも、学部卒でデータサイエンティストになれることはほとんどない。インターンで実績を積むことが大切。そうでなければ、大学院に進学することが必要。女子大でデータサイエンス学部を作る流れもあるが、女性の就職先はさらに少ない。

坂本：ソフトウェア会社への人材ニーズ調査をみても、専門学校生の就職先になりうる中小企業では、エンジニア需要は多いがデータ分析需要は小さい。経営企画とかエンジニア業務がこなせるうえでデータサイエンスもできるようにならないとニーズにマッチしない。

ポール：本業になりうる専門知識があったうえで、それに追加するようにデータ分析の力を付けるような位置づけの方がよい。社会人向けなら本業+データサイエンスの学びが実現できる。ただし、社会人は学校に学習だけでなく人的ネットワークも求めるので通信のみだとニーズに合わない。

■ 4期制への移行と今後の学主体性について

+ コメント：流行の取入れは必要。生成AIを活用した開発経験を持たせる

金井：2026年に現在の5期制から4期制に移行する予定。基本的には講義内容は現行に準拠している。

坂本：Vibe Codingの活用はどこかで扱った方がよい。

北川：生成AIの流行で仕事のニーズも変わっている所以に合わせる必要がある。現時点で言えるのは生成AIプロダクトに触れる機会は増やした方がいい。

ポール：プログラミング技術を基礎から積み上げるだけでなく、Vibe Codingを使って開発や成果物の全体像を早い段階で確認させる教育があってもよい。Vibe Codingでも何か1つプロダクトができれば学生の自信にもなるし、ポートフォリオにもなる。

生成AIが作るコードも、最初は良くても詰めていくとだんだんバグだらけになっていく。バグが出たときにそれを調べて直していくという掘り下げ型の学習で忍耐強くコードに向き合う学習が今後必要になってくるかもしれない。

北川：データサイエンスリテラシーのような科目を用意して、データサイエンスが企業や社会でどのように役立っているかを学ぶ時間があってもよい。

北川：他学科や広報と連携して、問題解決を目指す活動を行ってほしい。

坂本：自分事と思える分析や問題解決に取り組む姿勢を学生に持ってもらいたい。例えば自分の学習状況を自分で分析させて、どうやって成績を上げるかPDCAを回しましょう、といったことができれば面白い。

以上